
金魚 1

樂雨

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

金魚 1

【コード】

N1568D

【作者名】

楽雨

【あらすじ】

夏休み、姉の座るべき椅子に座っていたのは、偽大阪弁の巨大金魚だった。

まず、私の姉、朝美について話そう。そいつは私と同じ顔で同じ日に生まれた。まあ双子つてやつである。なんにでも手を出し、きつちり片付けるといふ私とは逆の性格をもっている。

夏休みの初日、私はのんびりと目を覚ました。背伸びをしてベッドをでる。二段ベッドの上に朝美はいなかった。もう起きたのか。いや、12時じゃしょうがないか、とダイニングへ向かう。すでにテーブルには昼ごはんがあった。母と朝美も今から食事のようだ。

「もう、あんたは！朝美は夏休みでもしっぴかり起きたわよ！」

そんな母の小言を無視して席に座った。じゃあお母様、あなたもしっぴかり素麺以外の昼食をつくってください。

ちゆるちゆると冷たさを味わってようやく目が覚め、私は気づいた。前の席に座っているのは朝美ではない。なんか。そう。

魚だ。

うん、玄関の水槽の中にいたはずの金魚が巨大化し、朝美の代わりに素麺をすすっている。なかなかグロテスクつかお母さん！朝美は！？私の驚きに気づいたのか、金魚はすつとヒレを口元にもつていく。黙ってるってことか。私が了解、とうなずくと満足気に再び素麺を食いだす。よく箸が使えるなと思っていたら落とした。気にせずつゆごと素麺を飲み干す。

お母さん気付け　！！

「母ちゃん、つゆとつてえな」

大阪弁！！お母さん気付け！！

「あら、薄かった？」

気付けよ！！

ははは、これは夢だ。なんて愉快的な夢だろう。そつだ、寝直そう。

「ごちそうさま」

「ごっつおさん」

一緒に食べ終わっちゃったよ。

「朱美い、ちよつと来いや」

とヒレ招きする金魚。なんか逆らえずについていく。金魚は私を玄關まで連れて行き、水槽をヒレ差す。

「朝美!!!」

私と同じ顔の人間が縮小化されて、水草をベッドに眠っていた。

「おめえ気付いたんやなあ、わいと朝美が入れ替わっていること」

「朝美をどうする気!!!」

かつこよくポーズをつけて聞いたが金魚はわっはっはっはと笑った。

「なーんもせん、ただの生活の交換や。夏休みやからな」

「なんか、こいつム力つく。」

「今日からしばらくわいが姉貴やで。よろしゅう頼んまんわ」

ほんとにこいつはなんなんだ。

一週間。私は金魚を観察した。

朝は早起きだし、家事をこなし、ボランティアにも参加。近所への挨拶もさわやかにこなしているようだ。あと勉強もたくさんしている。くやしいことに私より頭がいい。そう、真面目だ。そうだ、これは朝美の毎年の夏休みだ。

逆に水槽の朝美は一日中水の中でほわほわとしている。こんな朝美は見たことがない。水中は冷たくて気持ちよさそうだ。かるく水温計で水をかき回すと驚いたようにくるくると泳ぎ、私を見た。

「いいのかあ、貴重な夏休みが金魚に盗られているぞ」

水の中に音は伝わらないようで、くりっと首をかしげられた。

一週間と一日目。

「朝美、朱美、ちよつと来て!」

お母さんは私らを呼び集め金魚にメモを渡す。それには文字がびつしり書かれてる。

「今日安いのよ!」

ああ、だから二人（一人と一匹）で買い物に行つて来いってことね。金魚並んで買い物をする。なんか、なんか嫌だ。いや、百歩ゆずっていいとしても、こいつの性格が好きじゃないから嫌だ。

「朱美、置いて行くで」

ああ、はいはい、わかりましたあ。

安売りの行われているスーパーへ向かつて歩いてみると、子供の集団とすれ違った。どうやら保育園のお散歩タイムのようだ。その中の三、四人が金魚を見て不思議そうな顔をしていた。

「…ばれてるよ」

「んああ、あんくらいのがキには見えるな。まさか高校生のおめえに見えるとは思わへんかった」

私は幼稚園児と同じレベル？」

「まあ、おめえの場合は‘力’みてえなもんがある。金魚掬いでわいを掬えるたあ、何かしらの‘力’が必要やからな。まあ、世話したんは朝美やけど」

そうだ、こいつは中学生のときに祭りで私が掬ってきたんだ。なんで捕っちゃったんだらう。あ、こいつが一番元気がよくてレアものだと思っただ。なんで捕っちゃったんだらう。そうすればこいつと並んで歩くことはなかったのに。

「ねえ、どうして朝美と生活の交換したの？」

「そりゃあ、朝美に必要だったからや」

「朝美が金魚になる必要が？」

「ちよつとちやうな、おめえの姉貴には休む時間が必要だったんや」
わからん。夏休みだからごろごろし放題ではないか。ふいーと金魚がため息をついた。

「朝美の性格、考えてみい」

真面目でなんにでも手を出し、その全てをやり遂げようとする頑張り屋。かな。

「人間はな、回遊魚やない。動き回らなきゃ呼吸ができずに死ぬ、なんてことはないんや。体も精神も、使いすぎれば壊れちまう。で

もな、朝美はもうそんな生活が染み込んでいて休むことを忘れたんや。自分でもあかん思ってたても頑張ってしまうんや。辛いで、ほんまに。せやからわいは朝美と生活の交換をしたんや。休むことを思い出させるためにな」

なんかいきなりかつこいいこと言いやがった…そうか、朝美は休めなかったのか。

「おめえはもうちょっと動いた方がええな。肉付きすぎやないか？」
むにゅっと腕の無駄肉つかまれた。

「セクハラ！キモい！」

と思いつきり金魚の尾びれを蹴った。おふつ、と言って倒れた。ざまーみる。野良猫が数匹、弱ったと思われる金魚にかぶりついた。

「痛いかな！痛いかな！」

ビチビチと暴れる巨大金魚。うーん、猫にも金魚に見えているのか。

「も、もうあかん」

あ、死んだ？ あ、死なれたら朝美は元に戻らないかも！それは気持ち悪い！と野良猫を追い払う。

「ほんなこつ、おなごはおそろしかばい」

えっ、九州弁？こいつ大阪魚じゃないんかい。つてかもとも悪いのそつちだろ、謝れよ。

買った物も終わり、お釣りで買ったアイスを食べながら帰る。

「やる。お姉さんからのプレゼントやで」

金魚は私に最中アイスの中身をベチヨパミラつと渡した。サクサク部分が好きなようだが、私にデロデロのアイスを渡すのはふざけている。

「誰がいるか！」

と、アイスを顔面にぶつけてやった。

次の日、金魚と朝美は元に戻っていた。

「おはよう、朱美」

偽大阪弁でも偽九州弁でもない、朝美だ。休んだおかげか、いつ

もより元気そうだった。

そして金魚は、朝美的生活に疲れたのか動きがどことなく鈍かった。しかたないなあ、と私は水槽に最中アイスのサクサクをひとつまみ、入れてやった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1568d/>

金魚 1

2009年3月24日09時22分発行